市史編さん便り

第 23 号　2021 年 1 月 13 日(木)発行
土佐清水市教育委員会生涯学習課
市史編さん室

# ◎縄張図作成のための市内6城跡測量調査(通算 14 城跡)

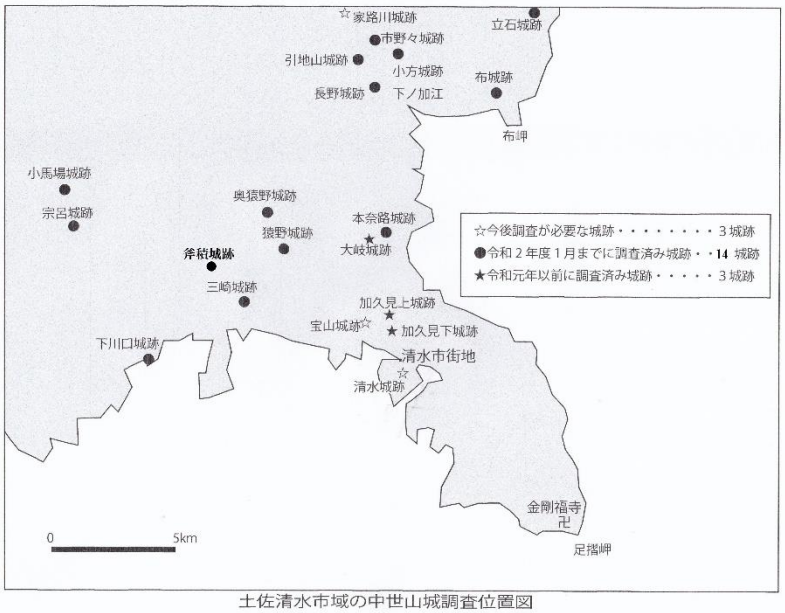
**1 月 9 日(土)‥‥「本奈路城跡」**
**1 月 10 日(日)‥‥「下川口城跡」「立石城跡」「引地山城跡」**
**1 月 11 日(月)‥‥「猿野城跡」「奥猿野城跡」**

土佐清水市生涯学習課市史編さん室が、昨年に引き続き 1 月 9～11 日（日～月）の 3 日間、本市で中世山城調査を実施した。本調査は、市史編集委員・高知県立埋蔵文化財センター松田直則氏、市史調査協力員・高知県立山田高等学校社会科教員尾﨑召二郎氏、市史編集委員・土佐清水市郷土史同好会会長武藤清氏、市史編さん室田村公利、由岐の 5 名によって行われた。

9 日は大岐地区の本奈路城跡、10 日は下川口地区の下川口城跡・立石地区の立石城跡・下ノ加江地区長野の引地山城跡、11 日は益野地区の猿野城跡・上野地区の奥猿野城跡、以上 6 城跡をこの間に調査し，その縄張図の下図を描いた。

本奈路城跡は、切岸や切通が現存しており、尾根筋を通り大岐城跡に至ることができ、大岐城と一体の山城の可能性が強いことを市史調査協力員の尾﨑召二郎氏は指摘している。このほか、引地山城跡・猿野城跡・奥猿野城跡は切通や竪堀・詰めなどが残存し、残存状況は概ね良好であった。引地山城跡は本丸詰めから下ノ加江川河口部が明瞭に目視でき、川筋や河口部を監視するための要塞であることが分った。

また、下川口城は下川口港東側に位置する島状の小山に立地している。北側に旧ハイランドホテル廃屋があり、その開発部分の遺構は既に破壊されてはいるが、南側に細長く延びる平場は切通や竪堀・本丸詰めが残存しており、遺跡がすべて破壊されているわけではなかった。残念であったのは、市内立石地区に所在する立石城跡である。その本丸詰め部分の東側部分は果樹園造成のため削平され、わずかに竪堀が 3 条残る程度であった。



土佐清水市域の中世山城調査位置図

**―本年度調査済み城跡―**

①市野々城跡(下ノ加江地区)
②三崎城跡（三崎地区）
③宗呂城跡（下川口地区）
④小馬場城跡（宗呂地区）
⑤斧積城跡（斧積地区）
⑥長野城跡（下ノ加江地区）
⑦小方城跡（下ノ加江地区）
⑧布城跡（布地区）
⑨下川口城跡（下川口地区）
⑩立石城跡（立石地区）
⑪引地山城跡(下ノ加江地区)
⑫本奈路城跡（大岐地区）
⑬猿野城跡（益野地区）
⑭奥猿野城跡（上野地区）

## ◎土佐清水市史編さん委員（監修）宅間一之氏

### 『土佐史つれづれ HISTORY OF TOSA』（飛鳥）を出版

本市市史編さん委員（監修）で土佐史談会会長宅間一之氏が、全 308 頁にわたる土佐史のガイドブックを出版した。旧石器時代から近代に至る土佐史 40 のトピックを３頁ごとにまとめ、初心者にも分りやすく解説。また、宅間氏のご自宅周辺の高知市春野町に関係するトピック、トピックの合間には、「窓からのつれづれ」と題された写真とコラムが挿入され、読者を飽きさせない工夫がなされている。市史編さん委員や市史編集委員の皆様で購入されたい方は、市史編さん室までご連絡ください。

↑出版された『土佐史つれづれ』（飛鳥）

## 「市史執筆のブレイクタイム(18)」

# “上田庄三郎”

市史編集委員長　田村公利

（１）その生い立ち

西村政英によると、当時の下川口町木ノ川で明治 27 年（1894）11 月 10 日に生まれたと記述されている（註１）。しかし、この明確な根拠が見当たらない。埼玉大学教育学部川口幸宏ゼミの聞き取り調査によると、三崎村で生まれ育った可能性が高いと思われる（註２）。

父は忠太郎、母は鶴である。鶴は忠太郎との結婚前に庄三郎を身籠もり、連れ子として忠太郎のもとに嫁いできた。したがって忠太郎の実子ではない。父は林業に従事し、木材の伐採で生計を立てていた。本州・九州から台湾など各地で伐採の出稼ぎを行っていた。家庭は貧しく、住居は四畳半一間のあばら家で、台風被害により家の柱が倒れても修繕することさえできず、入口を立て直してそのまま居住する有様であった。

尋常小学校から高等科へ進学したが、途中で中退した。その理由は、不明な点が多いが、思春期で多感さもあり、家庭環境も貧しく精神的にも肉体的にも様々なことがあったことが予想できる。しかし、最も根本的問題は家庭の経済力ではなかったか。事実、中退してからの庄三郎は、朝早くから夕方暗くなるまで父と共に山に行き、木材の伐採を行った。その傍ら、祖母が営んでいた行商を手助け、加えて

店奉公にも従事した。正に働き詰めの青春時代であった。

とはいえ、勉学に挫折したわけではなく、帰宅してからは、当時三崎小学校で訓導（現在の教諭に当たる）であった恩師・近藤善太郎（大岐地区出身・庄三郎の元担任・当時三崎小学校訓導）の個人指導を受けて、ランプの灯火でひたすら勉学に励んだ。高等科を中退しても庄三郎は、諦めず希望をつなぎ、粘り強く勉学に励んだのである。

### （２）若き青年教師の出発と闡明会（せんめいかい）の結成

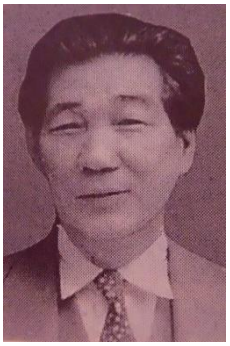
父・忠太郎は、知力・体力の優れた庄三郎を跡継ぎとし、一緒に林業をしてほしいという意向があった。しかし、庄三郎の勉学における素質を鋭く見抜いていた恩師は、父親を粘り強く説得し、師範学校への進学を薦めた。結果、高知師範学校に進学することになり、教職の道に進むことになった。庄三郎は、学校が休みに入ると、折に付け実家に帰省し、父の山仕事や祖母の行商などの手伝いを重ね、これを学資の一部に充当した（註3）。

大正３年（1914）、高知師範学校を無事卒業し、三崎尋常高等小学校に採用となり、以後現土佐清水市内の各小学校を転勤した。採用となった三崎小学校長は、謹厳実直で知られた沖八潮であった。当時は大典奉祝の行事が全国津々浦々で行われ、三崎地区も地域住民が野良仕事の合間に夜間芝居を練習した。庄三郎もこれに加わり芝居を練習した。沖校長は、教員が芝居に参加するなどもってのほかと考えていた。芝居に出たいと思う庄三郎は、校長を飛び越えて、三崎村長・沖良賢に直談判した。校長にさらに輪をかけたような厳格な村長は、教師聖職者論を盾にして首を縦に振らなかった。そこで開演の日が近づいたある日、折良く郡視学（幡多郡内教育行政の長）が学校訪問に来校した。そこで視学に出演の許可を得た（註4）。このように一度決めたら梃(てこ)でも動かないのが庄三郎であった。

庄三郎は、三崎小学校勤務の三年を終え、下川口小学校に転任となった。周辺の青年教員と交流を深め、そのリーダー的存在になりつつあった。岡田近太郎（益野小）・北代雄（松尾小）・西山順吉（幡陽小）・下谷晴吉（清水小）・同僚の田村信吉・後輩の横山才一・沖良輝などの青年教師団は、折に付け現下の教育の課題を論じ、結束を強めた。この時期、「日本教職員組合啓明会」が埼玉県師範学校教員・下中弥三郎を中心に組織され、雑誌「啓明」を発行して全国的に加盟が呼びかけられていた。時勢を見ることに長けていた庄三郎は、大正８年（1919）に「闡明会」を結成した。この会は、高知県下における教職員組合運動の草分けとなった。暗黒の戦時下が過ぎ、戦後早い時期に「渭南教職員組合」が結成された背景には、庄三郎らの地道な活動があった。この「渭南教職員組合」の組織化に尽力したのは、後輩・横山才一、沖本白水・樵児兄弟、谷村武雄、田中一、西村和三郎らの活躍があった（註5）。

次に、闡明会の綱領⑴～⑶とその具体的な取り組みを①～⑥以下に記す。これを基として「闡明会」は船出した。

⑴教育の進歩に有害して、時代の大勢に逆行する頑迷思想を撲滅すること。
⑵教育の高貴を内外に闡明し、われら教育者の生活を強固充実ならしむこと。
⑶青年教育者の輿論を闡明し、教育界に生新自由の気魄を促進すること。
①本会の主義に賛同する者によって成立する。
②特に会長を置かず、会員は平等の権利を有する。
③活動機関として係を置き、必要に応じて選定する。
④入会、退会は人格的に自由に。
⑤毎月雑誌「闡明」を発行し、われらの主張を宣伝する。
⑥時々教育界の新進教育学者を招聘して講習会を開く。


↑上田庄三郎

機関紙「闡明」は、渭南の教育界ばかりか、郡下はおろか、県下各地の志ある教育者の意見交換の場として活用され、後に小砂丘忠義らが刊行した「極北」と並び「西の闡明」と称されることとなった。

当時の教育界は、給与・待遇において地方公共団体の首長、議員、有力者の影響をもろに受けた。また、その身分・制度・実践内容については指導監視する郡視学などの教育行政機関に脅かされ、追従・迎合せざるをえない時代であった。この風潮を打破し、教育の自由を宣揚し、教員の団結を訴えて行動を起こしたのが「闡明会」である。この闡明会に所属する教員は、見せしめとして教育行政側から危険視され、現市域外の遠隔地へと散りぢりに移動・転任を命じられた。その弾圧の風は当然のことながら庄三郎にも吹きつけ、下川口小学校から下ノ加江小学校への転任を命じられた。しかし、この弾圧は庄三郎を抑え込むことはおろか、逆にその心を益々燃え上がらせた。下ノ加江小学校の庄三郎は、権力と徹底的に戦ったのである。その嵐の中を若干27才の青年校長は、奇しくも渭南教育会会長に選出され、就任した。以後5年間、彼は会長職を全うし、郷土の教育活動を推進していったのである（註6）。

**（3）青年校長「上田庄三郎の誕生」**

庄三郎は、下ノ加江小学校を一年勤務した後、大正10年（1921）に三崎村立益野尋常小学校長兼訓導に移動・昇任した。この性急な人事を不服とし、中村（現四万十市）の郡視学に直訴に郡庁舎へ向かった。伊豆田坂を越え、二十数キロの道を歩き通し、自分の口で直接抗議した（註7）。

益野小は5年前（大正5年・1916）の2月の強風の日に火災にみまわれ、校舎がない学校であった。建設用地や建設費などをめぐり校舎建設が大幅に遅滞し、その目途が立たない状況下であった。昇任・栄転とは名ばかりで庄三郎を舵取りの難しい益野小学校長に昇任させ、その責任を庄三郎に被せる形となった。庄三郎は、その状況をいち早く察知し、郡視学にそのことを糾し、宣戦布告を表明したのである。

この間、神社の境内や公会堂を利用して延々7年間も校舎のない学校での学習活動を児童たちは余儀なくされていたのである。庄三郎は、政治的な動きで校舎建設のための運動を起こすのではなく、在学する児童や保護者の声を村長に届くように戦術を取った。村役場へ児童の嘆願書を提出したり、「お宮の森」という童謡をつくり、学芸会で発表した。「お宮の森」は校舎の代わりに利用している神社の境内を意味し、校舎のない厳しい環境で何とか頑張って学校生活を送ろうという内容の歌詞である。学芸会で児童たちの合唱を聴いた保護者や地域住民は、健気な児童の姿に心を奪われて涙したと伝えられる。このように児童・保護者・地域とともに庄三郎は粘り強く校舎建設運動を展開した。そして、大正13年（1924）3月、ついに校舎は完成した（註8）。

↑7年ぶりに再建された益野小学校校舎　青年校長・上田庄三郎が心血を注いだ益野小学校

（４）理想の教育実現のために故郷を発つ

「私立雲雀(ひばり)ケ丘小学校校長」「教育評論家」として

庄三郎は、清心自由の教育を主張し、激しく文部省・師範学校の官僚主義を批判して危険視されていた。郡視学も庄三郎の動向を注視し、教育行政を恐れぬ行動力と理論武装に強い警戒感を抱いていた。

大正 14 年（1925）、理想の教育実現のために高知県の公立学校教員を退職し、故郷に別れを告げ、家族と共に神奈川県へと旅立ったのである（註９）。自由教育の私立学校「児童の村」分校・雲雀ケ丘小学校（神奈川県茅ヶ崎）校長に招聘され、着任したのである。しかし、その理想が実現する前に、まもなく学校法人が破産し、昭和２年（1927）11 月に閉鎖された（註 10）。

その年の 12 月に上京し、教育出版社に入社した。啓明会運動に参加、日本教育学会にも所属する。昭和４年（1929）、小砂丘忠義、千葉春雄などと『綴方生活(つづりかたせいかつ)』を創刊し、生活綴方運動に取り組んだ。

戦後は、週刊教育新聞編集長、日本教育新聞編集局長を歴任し、教育評論家として活躍し、多数の著書を書いた。昭和 33 年（1958）10 月 19 日、東京都後楽園近くの厚生年金病院にて肝硬変のため逝去した（享年 63 歳）（註 11）。臨終間際の庄三郎の脳裏に遠く故郷の景観が巡ったに違いない。

昭和 58 年（1983）、教え子や教育関係者により竜串に顕彰碑が建立された。

参考・引用文献

川口幸宏他『埼玉大学教育学部川口ゼミ、上庄研究現地調査』埼玉大学教育学部川口ゼミ、1985 年。
高新企業出版部『高知県百科事典』高知新聞社、1976 年。
高知新聞企業出版社『高知県人名辞典新版』高知新聞社、1999 年。
西村政英『魂をゆさぶる教育―青年教師・上田庄三郎―』風媒社、1973 年。

註

（註１）西村政英『魂をゆさぶる教育―青年教師・上田庄三郎―』風媒社、1973 年、12 頁。
（註２）川口幸宏他『埼玉大学教育学部川口ゼミ、上庄研究現地調査』埼玉大学教育学部川口ゼミ、1985 年、6 頁。
（註３）（註１）に同じ。15―16 頁。
（註４）（註１）に同じ。21―23 頁。
（註５）（註１）に同じ。25―26 頁。
（註６）（註５）に同じ。
（註７）（註１）に同じ。41―43 頁。
（註８）（註１）に同じ。41―163 頁。
（註９）高知新聞企業出版社『高知県人名辞典新版』高知新聞社、1999 年、100―101 頁。
高新企業出版部『高知県百科事典』高知新聞社、1976 年、65―66 頁。
（註 10）（註９）に同じ。
（註 11）（註９）に同じ。

## 〈編集後記〉

寒波が全国的に厳しい毎日が続いております。市史編さん委員・編集委員・関係者各位におかれましてはお変わりなくお過ごしでしょうか。。

前号でもお知らせしたように**２月５日（金）14 時から「市史編さん・編集委員合同委員会」（本年度最後）を市役所にて開催します。また、翌２月６日（土）10 時から「中央公民館歴史講座（中世山城巡検）」を計画しています。**

先着 15 名（中央公民館へ申し込みを）、公民館で講話の後、バスにて現地学習の予定。是非参加をして歴史を楽しみませんか。**〈マスク着用・弁当代必要・山登りのできる服装と靴・水筒とタオル〉**